



TITLE:

<學界動靜>アルタイ學の現状

AUTHOR(S):

村山, 七郎

CITATION:

村山, 七郎. <學界動靜>アルタイ學の現状. 東洋史研究 1972, 31(3): 401-411

ISSUE DATE:

1972-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152865>

RIGHT:

アルタイ學の現状

村山七郎

ここに「アルタイ學の現状」という表題をかかげたが、以下にのべるところは讀者が表題から期待するものとはおそらくかけはなれたものであらうことを豫めおこわりしておきたい。アルタイ學の現状をつたえようと志向するが、ここに述べるものは筆者の目に映じたそれである。筆者はこの分野における國際諸學者の業績に全面的に目を通してゐるわけでないで、きわめて不満足なアルタイ學現状像しか提供しえないことにたいし讀者の御寛恕を請う次第である。

いつたいアルタイ學とはなにか。ひろい意味ではアルタイ諸民族の言語・歴史・民族學的研究をふくむが、狭い意味ではアルタイ諸民族の言語の研究をさし、もっとも狭い意味ではアルタイ諸言語の相互關係を研究する學問、つまりアルタイ比較言語學のことである。

ちやうど、ゲルマン學(ドイツ語 Germanistik) やスラヴ學(ドイツ語 Slawistik) が廣い意味ではゲルマン系ないしスラヴ系諸民族の言語・歴史・民族學的研究をさし、狭い意味ではそれらの言語の研究をさし、もっとも狭い意味ではゲルマン系ないしスラヴ系諸言語の相互關係、系統的諸關係の研究、つまりゲルマン比較言語學、ス

ラヴ比較言語學をさすのと似ている。ただし、一方では最も狭い意味のアルタイ學と他方ではゲルマン學、スラヴ學とのあいだにひとつの、かなり大きいちがいがある。それは、後者においてはゲルマンないしスラヴ諸言語間の親族關係が證明され確立されているのに対して、前者においてはアルタイ諸言語間の親族關係はいまだ證明途上にあり、それにたいする否定的な見解をとる學者(アンチアルタイスト)もいるということである。

ここで述べる「アルタイ學」は最も狭い意味のそれではなく、狭い意味のそれをさすことにする。

アルタイ系言語とはなにをさすか。フィンランドの生んだアルタイスト G・J・ラムステット(一八七三—一九五〇。名前自體は北ドイツ語で「烏・町」を意味する)は、はじめモンゴル語、トルコ語(ついでながらチュルク語と書く人もあるが、こう書くことの民族名の頭音が Q であるような誤解をひきおこすおそれがあつてまずい。從來のようにトルコと呼んで非常に不都合な事態がうまれるわけでない。ソ連ではトルコ語一般を *Туркская речь* と呼び、トルコ共和國のトルコ語を *Туркская речь* と呼んでいる。後者はトルコ共和國をロシア語で *Турция* と呼ぶことから來ている)。滿洲・ツングース語をアルタイ系言語のうちにくめていたが、後に朝鮮語をもそれに含めるにいたつた。氏は *Mémoires de la Société Finno-Ougrienne* LVIII (1928) に發表した *Remarks on the Korean Language* においてはじめて「朝鮮語はアルタイ系言語の枝」という説を提出した。ついでながら同じ説を最初に提出したのはソ連の異才 E・D・ポリワノフ(一八九一—一九三八)であつた。氏は一九二七年「朝鮮語と『アルタイ』諸語との親族關係の問題につい

「Известия Академии наук СССР, серия VI, т. XVI, No. 15—17, Ленинград 1927, pp. 1195—1204 この論文は一九六八年モスクワ刊の『ポリワノフ一般言語學論集』に採録されている。一五六—一六四ページ）において朝鮮語とアルタイ系諸言語とのあいだに親族関係のあることを論じた。論證のしかたは翌年發表されたラムステットの論文のそれに甚だ近い。ついでながらポリワノフは同じ年にトルクメン語とヤクート語の資料にもとづいて、原始トルコ語に長母音が存在したとする説を提出し、これは後に一連の學者による検討をへて定説となった。ポリワノフとラムステットは朝鮮語の系統について獨立に、同じような説に到達したのである（二人の學者が獨立に同じ説を提出するということは學界において稀なことではない。わが國では「有坂（秀世）法則」なるものと知られているいわゆる古代日本語の音節結合の法則（一種の母音調和の法則）が池上禎造氏によって「國語・國文」第二卷第十號、一九三三年に、有坂秀世によって「國語と國文學」、同年十一月號に發表された。兩論文の内容が酷似しているのは驚くほどである。この法則に有坂の名だけを冠するのは不公平である）。

朝鮮語をアルタイ系言語に加える考えは次第に有力となりつつある。ここでもアルタイ諸語というときラムステットに従つて、朝鮮語をふくめることにする。

現在アルタイ系言語と言へば、このようにトルコ、モンゴル、滿洲・ツングース及び朝鮮語の四グループの言語があげられるが、それらの親族關係が證明済みというわけではなく、英國のクロウソン卿、ドイツのベンツィング氏、デュルファー氏、アメリカのシノー氏、ソ連のシチュエルバク氏はそれを否定している。それにもか

かわらずそれらは「アルタイ系諸言語」(Altaic languages)と呼ばれるのがふつうである。そこで、「アルタイ系諸言語」というのはいい、その呼稱がまだ條件的であることを忘れてはならない。

これらの言語の研究が各國において現在、どのような状況にあるかを詳しく説明することは筆者の意圖でない。筆者の目にふれたところを以下しるすにとどまる。

トルコ語研究

ユネスコの援助のもとに刊行された *Philologiae Turicae Fundamenta* (トルコ・フィロロジの基礎) 第一卷言語編 (ウィースバーデン、F・シュタイナー書店 一九五九)、第二卷文學編 (一九六四) (第三卷歴史編は未刊) が刊行されて以來の目ぼしい業績としてソ連科學アカデミー言語學研究所が刊行した古代トルコ語辭典 *Древнетюркский Словарь* をあげなければならない。編者は V・M・ナデリヤーエフ (何の學位、稱號も持たないがその實力はソ連トルコ學者の中でもきわだっていと言われる。非常にけんそんな學者)、D・M・ナシローフ (有名なトルコ學者、バッハ音樂の愛好家故 V・M・ナシローフの甥)、E・R・テニシェフ、A・M・シチュエルバク氏。一九六五年初夏筆者が言語學研究所を訪れたときは古代トルコ語の研究にとって不可欠の文獻となった。それまではフォン・ガベン先生の『古代トルコ文法』付録の語彙や S・A・マローフの『古代トルコ語文集』の付録語彙にたよっていたのである。

フィンランドの M・レセネン氏 (『トルコ語音韻史資料』『トルコ

カ(チャバルカ)を「日本」としているのは明らかに誤りである。

古代トルコ語の研究ではG・アイダーロフの『八世紀古代トルコ語のオルホン碑文の言語』(Язык орхонских памятников древнетюркской письменности VIII века) (アルファタ 一九七二)がある。突厥碑文研究の新文献のひとつとして看過できない。ただ三六七—三七七ページの文献目録、三七八ページの文献略説のうち、英獨佛語にかんするものには多くの誤植が見られるのは残念である。文献目録にはタリヤ・テキンの『オルホン・トルコ語文法』(A grammar of Orkhon Turkic, Bloomington 1968)がもれている。

一九六八年六月中旬、レニングラードでラドロフ(一八三七—一九一八)追憶記念集會があつたときの發表を集めたものが『トルコ學論集一九七一年』(Туркологический сборник 1971)としてさいきん發行された(モスクワ 一九七二)。ラドロフ著作目録、ラドロフ關係文献目録(二六一—二七七ページ)をよくみ、羽田亨についてふれている個所がある。

イランのトルコ語、ハラジ語(Khalaj)についてゲッテンゲンのドュルファー氏は精力的な研究を行ない、一九六九年には自ら第二回探検に参加した。氏はハラジ語は母音の長さ(短・トーンの變がない長・トーンの變る長)、語頭にp(*pにさかのぼる)がある點、形態論上の諸特徴によつて、原始トルコ語のおもかげを保存し、トルコ諸方言の中で地位を占めるとしている。氏のハラジ語研究關係論文は、ZDMG 111 (1967) Current trends in linguistics, VII 1 連の「言語學諸問題」誌一九七一年一號「など」發表された。またH. Scheinhardt, S. Tezcanとの共著 Khalaj materials

はインディアナ大學の Uralic and Altaic series, 115 として發表されている。

ドュルファー氏の見解は各國のトルコ學者、アルタイ學者の検討をうけつつあるようである。

モンゴル語研究

Kos-kyi Odrerの手に成るチベット語オリジナル(未発見)からのモンゴル語譯「佛陀の十二の行ない」の英譯、注、研究がN・ボッパ氏によつて發表された。ボンのハイシヒ氏の編集する『フミヤ研究叢書』第二十三巻をなす The twelve deeds of Buddha. A mongolian version of the Lalitavistara. Mongolian text, and English translation by Nicholas Poppe. (Wiesbaden 1967) がそれである。初期モンゴル文語の研究にとつて重要な貢獻である。氏がかつて學び、教えたレニングラード國立大學へのロシア語獻呈辭を巻頭に付しているのは、印象的である。原典はレニングラード大學東洋學部圖書館藏の珍らしい寫本である。もうひとつの寫本はウランバートルにもあり、そのフォトリコピーはインドのラダヴィラ氏に贈られた。ワイアース氏による書評が Journal of the American Oriental Society, 89, 1 (1969) に發表された。

初期のモンゴル文語と言へば、ボンのM・ワイアース氏(最近ボン大學の教授になった)はいわゆる古典期以前のモンゴル語の大部分を調査して『先古典期モンゴル文語歴史文法研究』(Untersuchungen zu einer historischen Grammatik des präklassischen Schriftmongolisch (Wiesbaden 1969) を出した。ふつて、モンゴル文語というにあつては、ウイグル字で書かれたモンゴル記録をよすが、

ワイアース氏は、そのほか、漢字で書かれたモンゴル語記録（元朝秘史、華夷譯語）、パスバ字モンゴル語記録をもふくめている（筆者による書評は「言語研究」誌五九號に出ている）。

ハンガリーではリーゲティ氏によって、モンゴル語記録集 (*Monumenta Linguae Mongolicae Collecta*) の「モンゴル秘史」(一九七二) (緒言・序文、ローマ字轉寫) Ⅱ「先古典期記録Ⅰ、十三、十四世紀」(一九七二)、Ⅲ「パスバ字記録」(一九七二) が刊行され、それと並行して、右のⅡの語彙索引二冊 (一九七〇、一九七二) も刊行された。數年後に中期モンゴル語辭典 (フランス語譯付き) を出版する豫定という。中期モンゴル語研究に對するハンガリー學者の熱意は大きい。リーゲティ氏の「モンゴル秘史」轉寫の序文は興味がある。氏は漢字音譯の直接の土臺となったものがウイグル寫本であること (われわれが以前から主張してきたのもそれとおなじ) をさまざまな根據から證明している。

おなじリーゲティ氏の編纂した *Mongolian Studies* (一九七〇、五九〇ページ) は「第二回モンゴリスト國際大會とそれを組織したモンゴル科學アカデミー及びモンゴル學者に捧ぐ」と獻呈辭のついたもので、各國の學者の手に成る論文三十三篇を集めたものである。この論集は重要な論文をふくみ、モンゴル語の研究家にとって不可欠のものである。日本からは服部四郎氏の *The Length of Vowels in Proto-Mongol* (原始モンゴル語の母音の長さ) と筆者の「モンゴル語における本源的長母音の理論的發展」(ドイツ文) とが掲載されている。前者は第一回モンゴリスト國際大會 (ウランバートル 一九五九年) において發表したものが誤植があるので再度發表したという。氏は「言語研究」(三六號、一九五九年) に、注

をつけて日本語譯を發表している。その説のうち、モンゴル文語發生段階にかんする部分 (母音間 *b*, *g* が弱まって、その差がなくなった段階で文語が発生したとなす部分) はラムステットの「モンゴル語の唇摩擦音の歴史について」(*V・トムセン古稀記念論集*, ライプツヒ 一九二二年) の説と論旨がほぼ一致してゐる。筆者の寄稿は元朝秘史のモンゴル語を表わす漢字で、從來 *do* (*do*) を表わすと見られた *朵* と多のうち、*朵* は *do* (*do*)、多は *do* (*do*) を表わすこと、十四世紀の東モンゴル語において非派生的な長母音が部分的に保存されていたことを取りあつたものである。

前出のボンのワイアース氏が、戦後、數度アフガニスタンに旅行し、モゴール語にかんする資料をかなり集め、その研究をボン大學中央アジア言語文化研究所の機關誌 *Zentralasiatische Studien* に發表し、モゴール語にかんするモノグラフを準備しつつあることもあげなければならない。氏によれば、モゴール語はモンゴル語における非派生的長母音の存在の證明を提供しない、という。

ニコライ・ポッペ氏 (前レニングラード大學、戦後はシアトルのワシントン大學、現在は退職したが大學の研究會に出席して後進の指導に當っている、という) が、ソ連を去ってからソ連のモンゴル學はサンジェーフ氏 (モスクワの東洋學研究所)、ベルタガーエフ氏 (モスクワの言語學研究所)、トダーエワ女史らによって代表されている。前の二人はブリヤート・モンゴル人であり、トダーエワ女史はカルミューク人である。かつて、ウラディーミルツォフ、ポッペ氏のようなロシア人がモンゴル語研究の指導者であつたが、現在はロシア人のモンゴル語研究者で有力な學者は少ないようである。最近 (一九七一年) T・A・ベルタガーエフ氏は「單語結合と現代タ

『ミノロジ、モンゴル語を材料として』(モスクワ 一九七二) という一般言語學的な性質をもおびた小著を發表している。

モンゴル語の研究はリーゲティ氏を中心とするハンガリー學派(ローナ・タシ、カラ、ペーシエ氏ら)、ポッペ氏を頂點とするアメリカ學派(クリューガー、J・ストリート、S・マーチンら)、ハシヒ氏を中心とするボン學派(ワイアース、サガスター氏ら、ドイツではさらに、ゲッチンゲン大學文學部の數年前に開設されたトルコ學・アルタイ學講座のドエルファー氏がいる)が國際的に活動している。フランスでは生成文法の立場からモンゴル語を研究する若いモンゴリスト・グループがいる。

ハンガリーの學者はモンゴル人民共和國の學者とのあいだの交渉が密接で、モンゴル共和國への旅行が容易であり、方言學的研究もかなり多く發表されているのが注目される(西ドイツのモンゴリストではわずかにワイアース氏がモゴール語の現地調査を行なっているにすぎない)。

ツングース語研究

最も多くツングース系種族を擁するのソ連であるから、ソ連においてツングース語の研究が盛んであるのは當然である。レニングラード時代のポッペ教授の教え子で『ツングース・滿洲諸語比較音韻論』(レニングラード 一九四九年)の著者V・I・ツィンツィウス女史は今なお健在である。ツングース系言語の最も詳しいすぐれた文法はV・A・アヴローリン氏の手に成るナナイ語文法Ⅰ(一九五九)Ⅱ(一九六一)である。有力な北方ツングース語であるエヴェンキの辭典(エヴェンキ・ロシア辭典、モスクワ 一九五八)

の著者G・M・ワシレーウイチ女史、南ツングース語、ナナイ語の辭典(ナナイ・ロシア辭典)の著書T・I・ベトロワ女史の業績はきわめて高く評價されている。ソ連のツングース言語學者に女性が多いことは注目されるところであるが、その中にあって男性の研究者和してすぐれているのは前記のアヴローリン氏とレニングラードの言語學研究所アルタイ部長O・P・スーニク氏である。スーニク氏には『ツングース滿洲諸語の動詞』(レニングラード 一九六二)というすぐれたモノグラフがあり、比較的・歴史的(通時論的)立場からツングース諸語の動詞活用の諸形式の成立・發展を究明しようとしている。氏の説には大膽な假説も少なからず含まれていると見られるが、鋭い洞察力の所有者である。

ツィンツィウス女史をはじめ、ソ連のツングース語研究家の中にはN・ポッペ氏の弟子が少なくないようである。というのは、ソ連の——またドイツやアメリカの——ツングース語研究にとって、ポッペ氏の『ツングース語研究資料。バルグジン方言』(レニングラード 一九二七)、とくに『ソロン語資料』(レニングラード 一九三一年)は劃期的な意義を持っていたからである。

ツングース語研究にたいして大きな刺激を與えたのは比較的・歴史的(通時論的)立場に立つK・H・メンゲス氏(コロンビア大學)の論文 *The function and origin of the Tungus tense in -ra and some related questions of Tungus Grammar. Language, No. 19 (1943)* である。ツィンツィウス女史の前記比較音韻論とメンゲス氏のこの論文に刺激されてJ・ベンツィング氏は音韻論、形態論、シンタクスにわたるツングース比較文法 (*Die tungusischen Sprachen. Versuch einer vergleichenden Grammatik. Wiesbaden*

1955)を發表した。これはソ連をはじめ各國のツングース語研究者たちの注目をひいた。そして氏のライバルであるメンゲス氏は『ツングース諸語』(Die tungusischen Sprachen. Handbuch der Orientalistik, Bd. V. Altaistik, Absch. III. Tungusologie, Leiden/Köln 1968)を發表した。これは總論とエヴェンキ、ラムート、ウデヘ、ナナイ語、女眞語とに分れ、とくに動詞活用 of the 通時論的研究においてきわめて興味ある見解を展開している。ツングース形態論におけるメンゲス氏(ベルリンでトルコ學、スラヴ學を學んだ氏は當代まれに見るほどの驚くべきポリグロットであり、該博な言語知識は有名である)の功績は明白であり、アメリカにおいて氏が「ツングース言語學への貢獻」によってさいきん學術賞を授與された(J・ラーダー氏よりの私信による)というのも當然である。

しかしツングース諸語の比較形態論はまだ十分に究明されてはいず、この方面における新たな研究が期待されている。

朝鮮語研究

筆者は朝鮮語について書く資格はないが日頃考えていることを簡単にのべて見たい。さきに見たように朝鮮語をアルタイ系言語と見る説は一九二七年にポリワノフによって、一九二八年ラムステットによって提出され、この考えはN・ポッペ氏によってうけつがれ、「朝鮮語が少なくともアルタイ的基層をもつことは確かである」(N. Poppe. Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Wiesbaden 1960, p. 6) 筆者の長友李基文氏(ソウル大學)はこの説をうけついでいる。氏は『國語史概説』(ソウル 一九六一、一八ページ)において次のような圖式を示している。

朝鮮語 d3ap-<*d3apa- 取る, 握る
 滿洲語 d3afa-<*d3apa- 握る
 ナナイ語 d3apa- 取る, つかまえる
 エヴェンキ d3awa-<*d3apa- つかまえる

朝鮮語 pis-<*püsü- 注ぐ
 滿洲語 fusu-<*püsü- 水をまく
 ナナイ語 pišu- 水をかける (Grube による)
 オルチャ語 pisiürü<*püsü- 水をかける

問題は共通動詞システムの存在を音韻法則にて明らかにするにとどまらずこれらのシステムの活用形態の一致を證明することである。李基文氏の研究(A comparative study of Manchu and Korean, Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. XXX, Heft 1-2, 1958)も、現在のところではラムステットのばあいとおなじく、この點を十分に證明するところまでは

アルタイ共通語
 夫餘・韓共通語
 夫餘共通語 韓共通語
 北方系諸語 南方系諸語

譯計畫に入っていない(B・レウィーン氏の私信)。朝鮮語はたしかにツングース諸語とのあいだに系統的關係を推定される。それは次の二例からでもわかる。

ここに北方系諸語というのは高句麗語その他をさし、南方系諸語とは新羅語その他をさす。ついでながらこの本の改訂再版が一九七二年九月ころに出版される豫定であり、そのドイツ語譯がルール大學東アジア學部によって行なわれる豫定である。李崇寧氏の「中世國語文法」(ソウル 一九六一)はドイツの讀者には専門的すぎるという理由で、ドイツ

進んでいない。

韓國のアルタイストとしては李基文氏が最もすぐれた仕事をしているが、數年前、ゲッチンゲン大學文學部でデュルファー教授のもとで滿洲語の研究で Ph. D. となった李喜雨氏（ひきう）がゲッチンゲンにとどまっていた（の學位論文を筆者はまだ見ていない。李喜雨氏も今後アルタイストとして進出するともう。ポッペ氏の流れをくむ李基文氏の活動は可なりよく知られているが、ポッペ氏にたいしてのごとくに對抗意識をもつデュルファー氏の流れをくむ李喜雨氏が今後の韓國學界においてどのような活動をするか興味があるともう。氏は李基文氏に學んだという。

アルタイ學的な視野から離れてはいるが（だからと言って著者自身決してアルタイ學に通じていないわけではない）ルール大學（西ドイツボフム市）東アジア學部の B・レウイン教授の手になる「朝鮮語動詞形態論」(Morphologie des koreanischen Verbs, Wiesbaden 1970) は朝鮮語の最も困難な問題と本格的にとり組んだ研究である。氏は朝鮮語動詞の對遇法に關する論文 (Der interpersonale Bezug im Koreanischen, Acta Orientalia Neerlandica, Leiden 1971) も發表し、ラムステット以後の最もすぐれた朝鮮語研究家であることを實證している（レウイン氏は本來日本語研究家として知られ、日本語關係の一連の著述は有名である）。氏は Dr. Kwon (權) Hyogmyon——ルール大學の朝鮮語の講師。マインツ大學の Ph. D. ——の協力のもとに朝鮮語の研究をすすめている。ついでながら權氏の學位論文は Das koreanische Verbum verglichen mit dem altsachen und japanischen Verbum. Zur Typologie des Koreanischen, 1962 である。

朝鮮語を第一に日本語と、そして副次的にアルタイ諸語と比較研究しようとする試みは權氏につづいて S・マートン氏（現在、イェール大學言語學教授）によって發表された (Samuel E. Martin, Lexical evidence relating Korean to Japanese, Language, 42-2 1966)。アメリカのこの才氣煥發の學者は三三〇の朝鮮語單語を日本語と比較している。アストン、金澤庄三郎（『日韓兩國語同系論』東京一九一〇年）、大野晋氏（『日本語の起源』東京一九五七年。ついでながらその英譯本『國際文化振興會一九七〇年に對する鋭い批評が R・ミラー氏によってさいきん發表された Monumenta Nipponica, 26, 1971) によるころみは、日・朝兩語の親族關係を證明するところまでは行っていない。マートン氏の所說についても、同じことを言わなければならない。マートン氏の研究について R・ミラー氏の批評が發表されている (Roy Andrew Miller, Old Japanese phonology and Korean-Japanese relationship, Language, 43-1, 1967)。日本や韓國の學者がマートン論文にたいして批評を發表しないのは残念である。

アルタイ比較言語學

もっとも狭い意味のアルタイ學というのは、アルタイ系諸言語の相互關係の研究、つまりアルタイ比較言語學をさす。ところで、アルタイ諸語の親族關係はまだ證明済みでないから、嚴密には「アルタイ系諸語」という用語も條件的なものであることはすでにのべた。それでは、アルタイ系諸語というのは、類型學的なパラレルを示す諸言語をさしているのであらうか。それは單なる類型學的な概念であらうか。長い歴史の過程において隣接のために生じた廣い借

用關係によつてアルタイ諸語の共通性は生まれたのか。アルタイ言語の親族關係を想定する學者をアルタイスト、隣接による廣範な借用によつて成立した關係と見る學者をアンチ・アルタイストと稱する。クローゾン卿（ロンドン）、シノール氏（インディアナ大學）、シチェルバク氏（レニングラード、言語學研究所）、ベンツィンゲン（マインツ、大學イスラム學教授）、デュルファー氏（ゲッチンゲン大學）はアンチ・アルタイストである（後述のスーニク編著、二二、二四ページにアンチアルタイストの關係文獻があげてある）。アルタイストの代表は現代においてはポッペ氏（シアトル）である。リーゲティ氏（ブダペスト）は明白なアルタイストとは言えないかもしれないが、中間派よりはアルタイスト寄りである。ソ連においてはアルタイ諸語研究家たちの態度は一時曖昧であつたが、最近ほだいたいにおいてアルタイストの立場が有力となつていくとみとめられる。それは、一九七一年レニングラードにおいてO・P・スーニク氏編集のもとに出版された論文集「アルタイ諸言語の共通起源の問題」(Проблема общности алтайских языков) において多くの論者がアルタイストの立場をとつていくことから知られる。この論集は一九六九年五月レニングラードで開かれた第一回アルタイ會議における發表に手を加えたものである。とくに編者スーニク氏は熱心なアルタイストのように見受けられる。ただしスーニク氏らも印歐比較文法が印歐諸語の親族關係を證明するために提出するような説得力あるデータを十分に提出しているわけではない。アルタイ諸語の名詞變化の形式や動詞活用形式の實質的一致を證明することはまだ十分に成功していない。ついでながらアルタイ諸語動詞比較研究では依然としてラムステットの「ハルハ・モンゴル語

活用」(一九〇三)と「モンゴル・トルコ語動詞幹形成論」(一九一二)がもつとも光っている。

アンチアルタイストが、アルタイ諸語共通要素を長期の隣接による借用で説明しつつも、各々のアルタイ系言語の祖形の母音體系を再構するとき同一となつてしまふ點、復元された子音體系もほぼ同一になる、というのはどうしたことであらう。この同一性を借用によつて説明することは不可能である。

とは言へ、ポッペ氏の『アルタイ諸語比較文法、第一部比較音韻論』(ウィースバーデン 一九六〇年)の比較例がごとごとく無條件に是認されう、というわけではない。この著者の比較例が借用(借用ならその方向)か否かを深く考え、借用の疑いのあるものは取りのぞき、その出版後において見出された好い比較例をくわえて、現在アルタイストによつて愛用されているこの本の改訂再版が要望されている。スーニク編著はこの點、ポッペ著書出現以後のアルタイ學(狹義の)への大きな寄與である。

アンチアルタイストの旗手——と言っても相當の高齢であるが——クローゾン卿が言語年代學(語彙統計學)の立場から、ソ連の言語學界の雑誌「言語學の諸問題」(一九六九、五號)に「アルタイ説を語彙統計學的に検討する」という論文を發表し、アメリカのスウォーデンの基礎語彙表によつてトルコ、モンゴル、滿洲語間の共通要素を数えたところ、それらを同系と見なすにはあまりにも少ししか共通語が見つからなかった、という議論を述べたが、その後、同じ雑誌(一九七一、三號)にこれに對する反論(「アルタイ説と語彙統計學」)がリーゲティ氏によつて發表された。わが國でも言語年代學の日本への導入者服部四郎氏と泉井久之助氏との間に、そ

の形態比較が進められるとおもう。また朝鮮語と日本語との比較も形態論比較にすむと思う。ツングース語、朝鮮語、日本語の比較研究はアルタイ學にたいして新しい分野をきりひらくにいたるのではなからうか。

「アルタイ學」について筆者の目に映ったもの、また筆者の考えていることなどを雑然と述べた。アルタイ比較言語學については現在、G・J・ラムステットの「アルタイ言語學概論」(Einführung in die altaische Sprachwissenschaft) I「音韻論」(ヘルシンキ一九五七)Ⅱ「形態論」(一九五二)Ⅲ索引(一九六六)、ポッペ氏の「アルタイ諸語比較文法、I 音韻論」(ウィースバーデン一九六〇)、「アルタイ言語學概論」(Introduction to Altaic linguistics) (ウィースバーデン、一九六五)があるが、ポッペ氏の恩師 W・コトウィチの「アルタイ諸語研究」(クラコフ 一九五三、ロシア譯モスクワ 一九六二)、「アルタイ諸語の代名詞」(Les pronoms dans les langues altaïques) (クラコフ 一九三六)がきわめて有益であることをのべておきたい。

アルタイ比較言語學に對して日本人學者の貢獻ができる分野はとくに滿洲・ツングース・朝鮮・日本語の比較研究にあると筆者は見ている。

追記

以上を書きおわった後で、PIACCのNewsletter No.7 (April 1972)を書記長のシノール氏(インディアナ大學)から受けとった。この號にはA・N・コーノフ氏の「ソ連におけるアルタイ言語學概観」と題する第十四回PIACC(ハンガリー、セゲド市、一

九七一年八月)への報告の英譯がのっている。筆者はこの報告をセゲドで聞いたのであるが、その時はロシア語による口頭發表のため、氏は詳しく報告を讀まなかった。その英譯八ページはソ連のトルコ語研究、モンゴル語研究、ツングース・滿洲語研究を手ぎわよく概括している。拙論はこれを活用できなかったのを残念におもう。讀者がそれをあわせ讀まれんことを希望する。コーノフ氏の報告はソ連におけるアルタイ諸語研究が組織的に、計畫的に行なわれていることをよく示している。